

## 八月の帝国劇場と歌舞伎座〈摘録〉

月郊

〈出典:「演芸画報」大正5年9月号〉

八月は帝国劇場で『いがみの権太』素襖落『増補天神記』東海道膝栗毛』を出した。『権太』は『義経千本桜』の中で最も好く出来ている。題を義経としても、彼の好悲劇的の一生を取ったので無く、それを繫つなぎにして、一場一場シテを替え、知盛と、権太と、源九郎狐が重おもになっているのは、菅原などと同じ作方で、これも出雲、千柳、松洛が手を分けて作ったからである。それが為ために全部の一貫を欠き、殊とに知盛と権太は平家方である、しかも『千本桜』とは吉野の場を重かさじたのであろうが、そこは狐にも人間同様、親子の情があると示したので『芦屋道満大内鑑』と同案、しかも親は皮かわになっているのは一層空想的で其その当時は人形をつかう手際で喝采かっさいを博ひろしたものであろう、またそれを標準ひょうじゆんにして作ったかも知れぬ、しかし今ではいかにケレンけんを弄ろうしても、そんな真似まねでは感心かんしんしなくなった。人獣共通の情も、もっと適切てきせきのあつかい方をせぬと、真面目まじめに見ていられぬ。渡海屋わたうみの場は『船弁慶』を転化てんかして、知盛を死んだ者にせず、あとへ戻かへって、大物が浦うらあたりに忍しのばせ、最早さいぜん落魄らくはくの義経よしつねに対し、幽霊ゆうれいに化けて復讐ふくせうとは、化し過ぎて、原曲が静しずとの別べつに始はじまり、幽霊ゆうれいの出現しゆげんに終おひる優美ゆうびと豪壯ごうさうを兼ねたのに及およばぬ。権太の一段は例の身代みがわらひ、首実検くびじつけんであるが、シテが武士と違ちがって、田舎いなかのごろつきという所ところが違ちがっている。それが心機しんき一転いつてんして故主こしゆに尽つす変り目かへりめを見せぬのは心理しんりを明あかにせぬが、それ丈ただ意外いがいに出て、昔むかしの見物けんぶつを驚おどかせたのであろう。そして親は死罪しざいを免ゆるされた旧恩きうおんの為ために報はいようとし、子は親の心こころを解とこうとして根性こんじやうを改かめるとは、義務ぎむの為ための義務ぎむで無く、情なさけの上うへのあわれがある。謀はかりりおおせた積たかりが、はかられて、自分の命いのちもかたりとられるとは、因果律いんぐわを厳きんしく当あて過ぎたが、それ丈ただにまたあわれも深い。親おやが怒いかって自分の手てで子こを殺ころすとは、ギリシャ劇ギリシャに当あるおそろしさ、しかもあとで訳わけが分わつて泣なくあわれさ、悲劇悲劇の要素ようすを十分じふぶんに伴たっている。但たゞ「かたり取とつた荷物荷物の内うち、恭うやうやしい高位こういの絵姿えすがた、弥助かほが面かほに生写せいしやし」とは、前まへの場ばで荷物荷物を明あけぬのに矛盾むじゆんする、そして内侍ないしの荷物荷物に維盛いせいの絵姿えすがたが入いれてあるのも不用心ぶようしんで、これは村むらへお尋者おぼんとしてまわしたものとせねばならぬ。何なににしても時代じだいで行く役やくを世話せわで行いってそれ丈ただ十分じふぶん情なさけを洩あらし、舞台面ぶたいめんも鮎屋あしや、そこへ平家へいけの公達こうたつの仮装かそうに、桃ももの様ような田舎娘いなかぢやうの恋こひは、今いまでも古跡こせきになつて、歴史上れきしじやうの事実じじつより真まらしく、吉野行よしのゆきの人ひとを立寄たてよらせるのは、情なさけの力ちからか、芸術げいゆつの力ちからか釣瓶形つるべがたの鮎桶あしづくを土産物みやげものにしているのも面白い。但たゞ此場このばは誰たれの作しやくであるか。此三人このさんにんの合作こさくは五ごある。

菅原伝授手習鑑 延享三年八月

傾城枕軍談 同 四年八月

義経千本桜 同 十一月

仮名手本忠臣蔵 寛延元年八月

双蝶々曲輪日記 同 二年七月

『枕軍談』の外ほかは皆秀作みなうまであるのは好よく手が揃そろっていて、従したがって此頃このころは人形浄瑠璃にんぎやうじやうるりの全盛期ぜんせいきで、芝居しばを圧倒あつぱくしていたといふ。但たゞし段毎くだごとに署名なづかせぬので、立作者たてしやくしやの名なになつたが、一場いちばずつ伝つたわるからは其その實際じじつの作者しやくしやを明あにしたい。此時このとき出雲いづもは五十七ごじち、松洛まつらくは五十二ごじに、千柳せんりやうは元豊竹座げんぷちやくざで、出雲

の処女作と同年から書き出しているから、そここの年輩であろう。『菅原』の寺子屋を出雲の筆とすると、直次の年復身代を書きもしまいが。また全篇からいうと、此場は挿話であるから、他の二人の中の一人(千柳)では無かろうか。しかし出雲は一人で『芦屋道満』を書いているから、復吉野の場の狐を書いたであろうか、確証を見出すまでは此判断は容易で無い。

技芸に付いても東西の相違がある。大阪では先ず人形芝居では極野暮な悪者ごしらえで、言葉は無論本文通り、劇でも役者の柄に依るが、大抵其通りで、捨台詞も純大阪言葉で行く。東京では団蔵が較大和の男という所に注意した、しかし台詞は江戸式であった。五代目菊五郎は幸四郎の型を更に江戸式にして着付、台詞も純江戸見にした。本文に忠実という点からいうと大阪式が至当である。しかし東京の役者に大阪言葉は自由につかい難い、大阪の役者が東京言葉をつかうより聞き苦しい、それ丈にこういう捨台詞の多い役を大阪式にはやり難かろう。また本文からして時代にも、土地にも余りかまっていなから、そう現実にかかわらず、其人々の長所を十分に發揮して、本文の主意を表わしたら好いでしょう。

今度の六代目菊五郎は先代の型に依って、それに自分の意気を加えた。先権の木の場の出、遺伝の著るしさに驚くばかりであった。しかも先代はどうしても江戸から来た旅の身の様子に見えたが、当代はそれ程江戸の印象に遠い丈、直侍や清心より、一層好くはまって見えた。向から見て来たという積で、視線を三人に注がず、つかつかと下手まで行って立止ったが、一寸は尻目にかけても好い所、権の実を落とす方を教える手つきの敏活、荷物をすりかえて行って又戻り、小金吾を止めてあやまる言葉の緩急、一転ゆすりになる太さ、砕けた中に急所急所は江戸狂言より重くしたのは好くこたえた。三人が入ったあとまで罵るのはちとどかつた。女房の異見に対して、墮落の道行をいうのは此役の好い説明になっている。子に引かされて帰るのは、其子をあとで身代りにするつらさの暗示になっている。其手あそびの呼子の笛を何気無く取って紙入へ入れ、後の場の用意にした好い注意であった。鮎屋の場は弥助お里の色模様の中へ入って又外へ出、特に弥助を呼出して画姿と見比べたのも先代の型であるが、あれは二人が知らぬ間に見比べる方が好かろう。母を欺く為空涙の滑稽、余り大仰で無くて好かつた。先代は捨台詞が多過ぎて、表へ出てからも「狸婆め」など云ったがそんな事も云わなかつたのは好かつた、花道の中程まで行って、父の帰るのを見つけ、あわてて戻ったが、あれは出るなりの方が隙間が無かろう。本文では「工夫の最中」としてある。金の隠し所に困って股の間へ挟んで座るのは悪い洒落。二度目の出は好い意気込であった。花道まで駈けて行って、金を思出し、跡へ戻る所は先代があつと云わせた所、今度も練熟には未早いが、相応にしてのけた。鮎桶かかえて反身になり、大股に入るまで、大阪式よりきびきびして、団蔵式より派手である。後の女房俵を引立てての出、割に軽くしていた。鉢巻を取るなり先涙をふくなどしないのは好いが、其まま梶原の前へ行くのは恐れ気が無さ過ぎた。「面を上げろい」から段々こたえて来た。皆入るのを見送って、女房が別を惜むのを、顎で制し入ってしまう跡を立上って、悲の思入は少し足らなかつたが、其隙を親に突かれてからの、せりふまわし、音調共十分であった。呼子をいなきり母に吹かせたが、自分で悩みながら吹出して、あとを渡しても好い。「血を吐く思」も好く現われていた。総じて江戸式の権太として十分であった。

勘弥の小金吾はいかにも役柄に相当していた。権太のゆすりに怒る意気込も十分、立廻はちと長

かったが大働<sup>おおはたらき</sup>であった。維盛は注意していたが、神経過敏の顔と態度が鷹揚<sup>かたむき</sup>を欠く傾<sup>かたむき</sup>があった。「俄<sup>にはか</sup>に変わるおんけはひ」も本文に無い文句からして変り過ぎるが、もう少し際立たぬ方が好い。お里の口説<sup>くどき</sup>を受ける間、自然の艶に乏しいのは東京人の通有性で、仕ぐさは勉めて神妙にしていた。

菊次郎のおせんはちと真面目過ぎて、権太が身を崩した原因の女とは見え兼ねた、もう少し素性を現わしたが好い。異見しても聞かれず、子に教えて一所に帰るまで情は一通り出ていた。お里はそれと見ちがえる程艶麗であった、しかしこれもちとおとなし過ぎた、もっと蓮葉に、諸事弥助より主動的になる方が至当、さわりは仰山で無くて好かった。大阪の役者はよく行灯を持出したり、それに前垂をかけた、維盛をつねたり、随分しつこい事をするが、ここは本妻の目の前故、礼もあり、張<sup>はり</sup>もあり、穩<sup>おだやか</sup>な中に情を示す方が好い。ここでの文句に、「雲井に近きおん方に鮎屋の娘が云々」とあるが平安朝より、恋にまで上下の隔てがある封建時代の差別を現わしている、しかし其時代にしても人情の真実で無い。それより今までの関係を仮と云われて怒るのは此句と矛盾するが本当の情である。維盛が男の操を改めて立てるのは現代に思わせて微笑させる。

松助の弥左衛門は五代目の時からの役を年と共に練熟し切っている。先小金吾の死骸につまずいてあやまり、身代とところづく思入のはかどり、刀を上げかけて松の枝にさわって驚く幕切までいささかの隙も無かった。次の場も維盛に対する態度の変化、娘に対しては少しやさし味を欠いたが、入ろうとして一寸維盛に会釈するなど行届いていた。権太の訴人を追いかけて行くと梶原に行当る所、どちらの好みか、従者四人の中になってよろよろとなるが、元は平家の侍で、分別もあり、度胸もある男であるから、従者では弱過ぎる、梶原自身と顔と見合わせて、始めて下になる方が双方引立つ。戻って首桶を出すと金が出て驚き、権太が出て直に後向いたのは其芸の邪魔にならぬ用心であろうが、其役としては物足らぬ、もっと悔しがって、軍兵衛に制せられるが好かる。権太に斬突けて「三千世界に子を殺す親といふは己<sup>おれ</sup>ばかり」の所で痛切であった。権太の懺悔を聞いて、孫の事をいう台詞を略したのはどうしたもの、悪者の子<sup>だけ</sup>はね出されていようというあたりは涙のこぼれる好い句である。

吉右衛門の梶原は頬髭を黒くして、較若くした。これは例の小人<sup>しょうじん</sup>と違い、わざと計られた顔をして計って行くのであるから、表嚴重に見せて、裏に思慮がある役、其心持は好く見えた。但始<sup>はじめ</sup>の出に従者に弥左衛門を制させたから、其間床机にかけたのは、気がゆるむ、ここは先微塵の隙も無い威厳を示さねばならぬ。首実検は首より権太の実験で「好い技倆」とは女より権太の腕へかけた句と解する方が好いから、おせんより多く其顔に目を注ぎたい。陣羽織は本文に「脱いで渡せば」とあるが、袈裟が入れてあるから持たせるのも好いがそれ丈<sup>み かげ</sup>身代を予想して用意した事になるが好いが、そこは旧劇の無頓着、引込に権太の体を注意したのは行届いた。

総じて此場を菅原の寺子屋に対照すると、手習机を並べた背景に対して鮎桶、病体長髪の松王、赤面の玄蕃、質素な源蔵、地味な戸浪、礼服の千代に対して嚴重な梶原は玄蕃より重く、松王より軽い、世話の権太は源蔵より複雑である。弥左衛門は千代より苦しい自分の手で殺す吾子、お里は戸浪より艶な恋、首実検の危さは寺子屋の方が注意を集めるが、前の用意、後の苦悶は此方が深い、人情は此方が細かい。画模様<sup>えもよう</sup>は松王の姿が異彩を放つので、あの方が立派に見えるが、打合はせもせず、吾子を先へやって置いて、身代にさせるとは、宛にならぬ目算で、いかに理を

重んぜぬとはいえ、余りに迂遠である。(後略)

### 道行初音の旅—舞踊の味い方

小谷 青楓

(「演芸画報」昭和7年3月号)

二月の東京劇場では千本桜の道行が出た。「道行初音旅」俗称「忠信」はよく出る舞踊だが、この浄瑠璃が何うしてこんなに持囃されるかというに、第一に舞台面が花やかで美しい、第二に出てくる者が静御前や忠信や、歴史上お馴染の人物である、第三には脚色があつてチャンと芝居の筋が通つて居るから誰が見てもよく解る。これが大衆向で今も猶人気のある所以だが、尚もう一つ見遁せないのは歌詞が優れて居る事である。舞踊の地として用いられる音楽の中でも、長唄物などに比して一段と優秀な物とされて居る。それも其筈で実はこの浄瑠璃は単純な踊の地として書かれた物ではなく、日本文学の粋ともいふべき義太夫狂言中でも傑作と称される「義経千本桜」(延享四年竹田出雲、並木千柳、三好松洛合作)の一節だからである。原作通りではないがそれを基として作った物だからである。そしてこれに伴う作曲、振付の功勞も亦大いに与つて力ありだ。

千本桜は序では川越太郎の上使が遺っているが、我等の知れる範囲では団十郎と工左衛門が勤めた位なもの、二段目は鳥居前で忠信、渡海屋大物の浦で知盛、三段目は椎の木から釣瓶鮫でいがみの権太、四段目がこの道行から川連館で狐忠信の見せ場、五段目が本誌前号の表紙に描かれた雪の吉野山で終る事になって居る。この道行は義太夫狂言の景事と称するものであるが、江戸の歌舞伎式に移されてからは江戸浄瑠璃を使って舞踊式に演じるようになり、今日では独立した一幕物の舞踊劇となったわけである。随つて地の音楽も常磐津、富本、清元といろいろの流儀を使つて一定しない。その用うる音楽によつて劇の趣きや味に多少の変化を及ぼすのは当然である。近頃では大歌舞伎でやる場合は大抵清元で竹本連中と掛合になるが、嘗て大阪の俳優が美音会に招かれてこの舞踊を出した時、特に地は長唄でという註文を出した。東京では長唄の忠信なんていうのは余り例が無いので、長唄連中が急稽古で出演して間に合せた事があつたが、以前は京阪では忠信でも戻駕でも鞍馬獅子でも、皆長唄連中というような事になって居て、常磐津とか清元とかいうハッキリした区別は無かつたのださうである。一体忠信は初音の鼓を慕う變化の勇士といふのだから、今日の人心には馬鹿馬鹿しい骨頂だが、斯ういふ夢幻的な構想は西洋の歌劇にもありさうで、扱ひによつては動物たる狐は勿論、柳や桜の精霊でも舞踊としては中々面白味のある物だと思ふ。「忠信」を鑑賞するには如上の事柄を念頭に置いて味つて貰いたい。

所で今度の東劇だが一声山下しの鳴物で幕があくと桜花爛漫たる山又山の背景、舞台真中に桜の大木、日覆から釣枝、山の緑色が濃過ぎたが昔の名所図会でも見るようで、なまじ新味を見せないのが可い。静が杖や笠を持った旅姿でありながら、チャラチャラと裾を長く引いて居る時代劇の事だから……浄瑠璃は今度も清元で、然も延寿、栄寿を並べた所、今日これ以上の清元は無い訳だが、声を痛めたのか愈々凋落期となつたのか、延寿太夫の「宵に寝よとはきぬぎぬに」のあたり、昔

の美音は何処へやら、如何にも苦しそうな声を出して居た。竹本連中の克明な語り口に対し清元は文句が甚だ不明瞭なもの流儀のため一考を要する所で、歌詞を知らぬ者が聞いたら何が何だか全然意味が通るまい。

菊五郎の静は花道を出た所、綺麗は綺麗だが余り大々として居る、船弁慶の静は好いが興行政策とはいえこれでは飽く迄忠信に廻るべき優である。鼓は大抵影から付けるのだが此優が自分で調べるのは可い。此優に限らず嗜みのある俳優なら自分で打つが、桶の底を叩くようでない限り少々揃でも自身調べて貰いたい。そこでこの鼓だが義経を偲ぶ心と解釈すると、忠信を呼び寄せるためと解釈するのと二様あるが、菊五郎は後者である。物語になって「平家の方にも名高き強弓」を自分で云うがその声の綺麗なのと振に移っての柔か味、ともすると男になる所だが菊五郎の静はここが図抜けて好い。藤太に揃えさせる草履が可愛らしいのも用意周到である。

羽左衛門の忠信は「おくれ走せなる忠信が」で花道のスポンからセリ上る。団十郎は揚幕から出たそうだが、これはセリ上った方が狐らしくて可い。衣裳は黒地に金糸で源氏車(裾、肩抜、小さく散らした物等いろいろ)がお走りだが、今度は牡丹か何か唐草のような地紋のある五つ紋を用いて居る。菊五郎もこれだったが菊五郎のような格幅だと上品に見えて可い。大きな源氏車の模様では却って侠客か相撲染みるが、瘦形の羽左衛門では見た目が淋しい。遠くからは無地に見える。眼張を強く口を大きく割って居るが、顔を見なければ早野勘平のようである。舞台へ来て大小を取ると、腰から下が特に淋しく丸々とした菊五郎と並ぶと層一層細く見える。「弥生は雛の妹背仲」のあたり、肉感的の静、色男然たる忠信では主従らしい顔をして居ても内実は関係がありそうに見えて可くない。配役の罪である。静を無事に送り届けなければならぬという忠義と、子狐が親を慕う心持を見せるのが忠信の性根なのだ。緋縮緬の肌抜きになって漸く忠信らしくなったが物語の間、時々形の悪い所や、踊がせせこましく見える所のあるのは遺憾だ。引込は普通は狐六法になるのだが、菊五郎は六法でなく下座の唄を使ったのが不評であった。羽左衛門は一寸狐の身振を見せ気を変えて突袖をしてキッと見得、布引の実盛のように悠然と揚幕へ入るが羽左の忠信はこの引込が最も好い。吉右衛門の早見の藤太は観客は大喜びである。